

【ねがいましては】

平成17年2月25日

第174号

KYOWA SCHOOL

「信頼」

「日本の国が駄目になったのは、教育と農業に競争原理を持ち込んだことにあるというのがぼくの持論です。」

『われらいのちの旅人たり』(灰谷健次郎・角川文庫)

風邪をひき、病院の待合室で読んでいたときの灰谷さんの文章がこころに止まりました。「そうだそうだ・・・。」私は読みながら何度も何度も相槌を打っていました。心も体も熱くなっている自分を感じました。(実は37.8度ほどの熱がありました。)

命をはぐくむものに競争は荒廃をもたらすだけである、というのが灰谷さんの主張だそうです。全くもってその通り・・・。最近の事件の異様さは、その荒廃の現れのような気がいたします。小学生が小学生を殺傷する。子供たちが危険な目に遭う。子供が先生を殺傷する。地球の中で最も重いはずの『命』がどんどん軽々しく扱われてゆく。

夫婦の間からの子『生命』の誕生。それが『家族』というスタートラインを引き、「一家ひとつになって、助け合って歩いてゆこうね。」という当たり前な愛情はどこへ行ってしまったのでしょうか。家族という最も重い信頼でつながれた心はどこへ行ってしまったのでしょうか。

子は、どのような悪いことでも、いざそれを行動に移そうとするとき、母や家族の顔を思い浮かべれば出来るはずがありません。家族がひとつであることは、社会平和に必須なものであるはずです。

母と子が友達同士のように仲が良い。いつでも母と子はぶつかってばかり。どちらが犯罪を呼び起こすでしょうか。簡単な問題です。

つい先日、皇太子様が会見の中で読まれた詩、さっそく調べて見ました。

「子ども」 ドロシー・ロー・ホルト

批判ばかりされた 子どもは	非難することを覚える
殴られ大きくなつた 子どもは	力にたよることを おぼえる
笑いものにされた 子どもは	ものを言わずにいることをおぼえる
皮肉にさらされた 子どもは	鈍い良心の もちぬしとなる
しかし、激励をうけた 子どもは	自信を覚える
寛容にであった こどもは	忍耐を おぼえる
賞賛をうけた こどもは	評価することをおぼえる
フェアプレーを経験した こどもは	公正を おぼえる
友情を知る 子どもは	親切を おぼえる
安心を経験した 子どもは	信頼を おぼえる
可愛がられ 抱きしめられた 子どもは	世界中の愛情を 感じ取ることを おぼえる

最後の3行が最も子に必要なものであると思います。

『友情を知る 子どもは 親切を おぼえる』は、最も学校が行うべきことであると思います。

『安心を経験した 子どもは 信頼を おぼえる』は、学校と家庭、つまり子供を取り囲むすべてです。

『可愛がられ 抱きしめられた 子どもは 世界中の愛情を 感じ取ることを おぼえる』

家庭が最も行わねばならないことです。良かれ悪しかれ、子の帰るところは家庭です。家族のもとです。

競争原理を前面に出していくには友情は育ちませんし、子が家庭で安心できなければ心の疲れを取ることなど出来ません。

子と母の間での感情のぶつかりの過半数は『成績』ではないでしょうか。成績は家庭内での安心と信頼を壊す要因になっています。つまり競争原理がいたずらをしていることになります。

わたしは最近とくに強く子供たちに言うことがあります。競争の持っている意味です。「競争できるのは相手がいて初めてできること。だから勝っても負けても最後にはかならず『ありがとう』の気持ちを持とうよ。」「負けるほうがきっとやさしい人になれると思うよ。だって負けた人の気持ちがわかるでしょ。」などなど。小さい時から子供たちは『勝ち負け』の世界を味わいながら成長します。勝ち負けなしで生き抜いてくることなど考えられません。だから私はこれからも言い続けたいと思っています。『勉強は競争じゃーないよ。』

3月の予定・・・12日(土) お母さんたちの勉強室 → 別紙ご参照ください。

春休みの予定 → 後日お手紙をお渡しします。